

どんびま

2006年10月3日発行
 発行者 椈の湖農業小学校

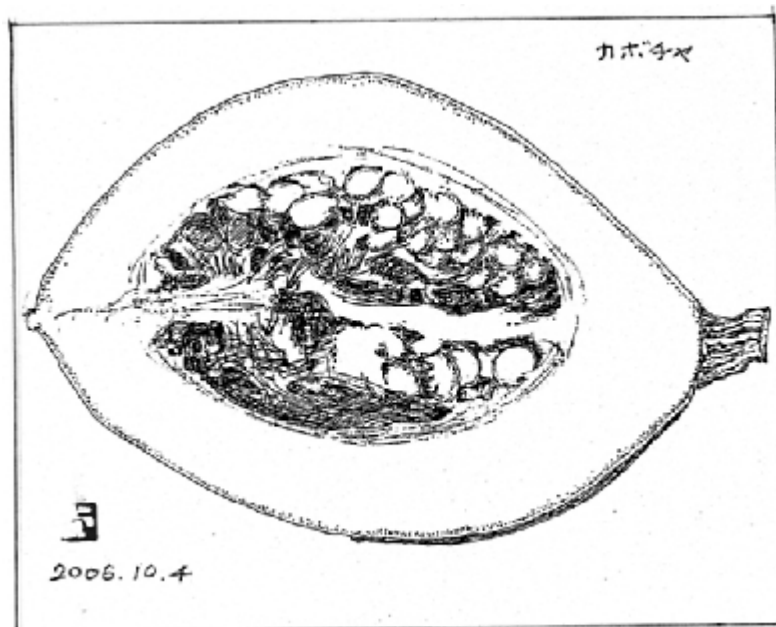
秋の七草

七草粥があるとおり、春の七草が食材となる山菜・野菜であるのに、秋の七草は野山に咲く代表的な七種の草花をいう。萩・薄(ススキ、尾花とも)・葛(くず)・撫子(なでしこ)・女郎花(おみなえし)・藤袴(ふじばかま)・桔梗(ききょう)の称である。

いずれも小さい花・あるいは地味な花で、山陰やなんでもない道端に他の草木の中に埋もれるように咲いていると、尚、愛しい気持ちになる。

万葉の昔から自然を愛で、慈しんできた日本の心をいつまでも伝えたいものである。

(草)



10月授業日のご案内

日程	10月15日(日)	持ち物	手袋、タオル、雨具、着替え
受付	9:00 ~ 9:30		買い物袋(たくさん)、箸
はじめの会	9:30 ~ 9:45		食器
授業	9:45		文集の原稿を持参してください。
(収穫・畑仕事)	~ 12:00		農小での楽しかったこと、心に残ったこと、ご意見、思い出の絵、何でも結構です。
昼食	12:00 ~ 13:00		同封の原稿用紙に、濃く書いて下さい。
授業	13:00		(書き方は、後のページで説明します)
(稲の脱穀・焼き芋)	~ 15:00		10月の授業日に欠席の場合は、今月21日までに事務局山内まで郵送して下さい。
終りの会	15:00 ~ 15:30		郷土料理 栗赤飯、豚汁ほか
締め切り	10月12日(厳守)		
問い合わせ・緊急連絡			
	0573-75-4417・09051109362・FAX75-4418		(山内總太郎)
	0573-75-2109		(椈の湖自然公園管理棟)当日のみ

～とくちゃんの農小レポート～

「本物のどんびき現る」

昔食料の乏しかった時代に焼き畑農業と云って、枯れ草を焼いた灰だけの肥料で育ってくれるソバは、とても貴重な穀物でした。

そんなソバの花が一面に咲き乱れる中で、9月の授業が始まりました。

- * 栗ひろい。 例年皆さんが楽しみにしている栗ひろいですが、今年も丁度、端境期（早生と晩生の間中期）に当たるため、多くの収量が望めず残念でした。生栗の鬼皮剥きは大変な作業ですが、ホームセンターには「くりくりぼうず」とか称する皮むき器があるのをご存知でしょうか？ 1800円位かな？
- * 畑の作業。 白菜苗の植付け。だいこんとカブラの種蒔き。持ち帰り用のねぎの収穫。ねぎは種蒔きから収穫までが、玉ねぎ等と同じようにとても長く、その分収穫期も長く続くので大変便利な野菜の一つです。
- * バケツ稲コンクール。 今年は例年に無く多くの出品者がありました。バケツ19杯、稲穂7束、先生方の慎重な審査の結果により最優秀2点、優秀3点、努力6点が選ばれました。全ての作品は1週間後の「椀の湖そば祭り」に農小の成果として展示披露され、11月の卒業式の日表彰が行われます。
- * 昼食。松茸ご飯。お吸い物。トマトと玉ねぎのサラダ。かぼちゃの素揚げ。ニンジンきうりの塩昆布の和え物。 私達の子供の頃は、家の近くでキノコが沢山採れていましたが、最近では松茸も外国産のようです。
- * 午後の授業は稲刈り。 校長先生がたいそう気に掛けていた、稲の作柄は如何でしたでしょう。一部病気（イモチ病）のため不作の部分も有ったようですが、ハザ掛けの様子では結構な収量が見込めるのではないのでしょうか？。一般農家の方では例年に比べやや不作と言われています。
- * ジャンボかぼちゃ。 農小の畑では全滅でしたが、お父さん方が他の畑（前の農小畑）で作った物が出品され、53.6kgで25位だったそうです。 ちなみに優勝した作品は102.6kgでした。来年は頑張って入賞を目指してください。

～とくちゃんのちょっと一言～

今月は珍しいお客さまがありました。94回を重ねる「農小だより」のタイトルとなっている「どんびき」の本物が現れました。昔は「ひきがえる」といって雨降りなどにはよく見かけたものでしたが、近年ではほとんど見かけなくなりました。

今年の夏にキャンプ場管理センター前の自販機の基に、明かりを求めて群がる虫を狙って毎晩現れていましたが最近見かけません。ひょっとしてこの「どんびき」が農小見学に来てくれたのかも？ 皆で見たり触ったり感触？を確かめました。如何でしたか。

～ 安保兄の百姓ばなし～

「一本のワラから」

9月17日稲刈りが終わった。終わったとは言え、なにか中途半端で気分がすっきりしない。イモチ病とイノシシに食べられ踏まれたことのダブルパンチで刈り取り出来ない部分を残してしまったからだ。特に、田んぼの中央部は壊滅的だった。

田植えの前に代掻きといって、水を張った田の土をトラクターでかき混ぜるが、事前に撒いた肥料はあまり移動しない。つまり肥料のムラ散布が拡散されなかったのだが、ものは、あぼ兄の堆肥がよく効いた、イヤ、きき過ぎたのだ。ちょっと複雑な気持ちである。

稲刈りの田んぼで、イノシシに食べられて飛び飛びに残っている稲穂を一本一本刈り取っていたお父さん、落穂をていねいに拾っていたお母さん、どれも同じように育ったのだと大切にしていた姿に頭が下がった。

稲作は米を取るというだけでなく、人々の生活に深く関係し、とけこんでいた。稲作文化といって、稲作を中心とした年間行事の数々、ワラ一本たりとも捨てることなく使う生活の知恵と技などなどである。その一例として

- ワラは
- ・牛馬の飼料・敷きワラ（フンと共に肥料に）野菜の敷きワラ
 - ・縄・注連縄
 - ・ムシロ（蓆）・カマス（ムシロを袋状にしたもの）・菰
 - ・ワラジ・わら草履・ミノ（蓑）・セガミノ（背中あて、日除け、クッション）
 - ・その他、畳の芯・ワラ布団などの加工品・人形などの工芸品
- 刎殻は
- ・断熱材（農産物の貯蔵などに）
 - ・肥料・土壌改良材
 - ・燃料（炊事・暖房など）

として使われてきた。しかし、最近では使われない事、作られない物が多い。

少し前に、県農政事務所の友人から冊子が届いた。「平成17年度県産米の10a当たり全算入生産費は、前年に比べて7.6%増加」とあった。

農村の現場では、年々、転作が増え生産量も減少し、それとは逆に生産経費ばかりが値上がりして大きな赤字となっている。そのことが農家の意欲を削ぎ、主食である大切な食べ物を作ると言う建前は承知しつつも、農家の米離れに拍車がかかっている。

さらに時を同じくして、こんな手紙が届いた。

「自動車メーカーの本田技研が稲ワラからバイオマス燃料を抽出することに取り組んでいます。これからは稲もワラだけで用が足りる時代になりそうです。菜種、稲それにヒマワリなど自動車の燃料に利用できる作物が重宝されると同時に農産物は燃料に引っ張りだこになりそうですね。減反(転作)田が復活するのも間近のようです。」

文集原稿の書き方についてお願い

原稿用紙は 2 種類あります。

- ・ **低学年**（3年生以下）は **10 ミリ方眼** に書いて下さい。
- ・ **高学年と親さん** は **7 ミリ方眼** に書いて下さい。中央の横 2 列を空けて、**太い線の枠内に 2 段** に書いて下さい。

どちらも太い線の枠内に「題」と「氏名」も書いて下さい。

皆さんの原稿はそのままコピーをとって印刷にかけますので、できるだけ**濃く書いて**下さい。鉛筆なら HB がいいかも。消しゴムで消して書き直す場合は前の字を**きれいに消して**下さい。

文章だけでなく、絵・スケッチももちろん O.K. です。

皆さんの一番心に残った事、楽しかった事、関心があった事など何でもお書き下さい。
農業小学校に対するご意見も是非お願いいたします。